



ノ
三ノ
一

全拾冊曲亭主人著

里見八犬傳第八輯

上帙五冊 三之卷廿五下

丁子屋平兵衛板



南總里見八犬傳第八輯卷之三

東都

曲亭主人編次

第七十八回

北西自賞罰七怒
東城襲て首級七賜

復説社介小文丑の二大去功を賞と稱し津衛謀を天庭に捕ら
如俱不怒と声言や不違に多軌支由元庵僧伯罪あら先を證議し禁獄を
へなるも一言佳又向り多する誣引をせ勢をたふし能ふや其廢る故を武士に似
はれん部伍の舉動多の情由せんのかと致圍に置る勇武憤激乱れ騒ぎ騒ぎ連立
辨辨の素ゆめつとあそと死死の眼光飛りや惹ると力士の舌を挿ひに纏り怖れ
のよく素と取縮方登時津衛由元の憶も嘆息の貌を改め恭しく二天士と對ひ
事情を告げし怒とらり理りぬらと其の本意を便是宣勞君皇春の

母公は服殿の處分より先や及意て説示元怒をためり所ねり抑宣分君景春公
二箇の紀女弟あり皆是服大方自御前の丸腹か御鍾愛深き第一の紀女弟武藏
州豊嶋郡大塚の石左衛門尉憲儀主御前御下下大塚殿と稱する長尾白石
大石小幡の原是憲儀は美濃領の四家老より共上角の勢ひあり又次女の弟は
洲同郡石渡の城主の千重介自溜主の内室より船場殿と稱する宣分君の弟は
西管領山内と不和の後大石千重の両雄も志く志く運けり岩田家三の弟方と
今年前和服殿大塚を法場と開せり折大石殿の家臣を軍木五倍二殿上社平卒
川井八と初とと擊れい難兵助とと刺石田河の頭あり俣番丁田進力義殺の
之あり及び折爲後仁田山晋五の敵を捕ありと風声あり大石の通て假自叙あり実ハ力一尺八
と唱做したる使者第兄弟ありも當時大石殿ありの勢あり大石自御前も知合あり
又らあつたむとむ大田生りの次の年石渡の城内あり且用野との假女弟

母公の家臣馬加日記より事轉録吾後類まき兼皆擊れ一夜文定編は且用野と相資て
俱は逐電まきりこの事亦船場殿あり大石公信ととん消息ありうらとや三里中
夕より介る今番和服殿が小石谷の御る客店より酒類二と喚做る友入の強盜又
堂より一箇の漏れを敷き捕まひ輝の輝と那御長かぶえわう徳而件の訴状を大石
自御前の内より三追大田小文君とと浮浪人の畧表を武藏の大塚あり同西の西三と
共信は大石家の陣末田原役家臣の射を殺し額藏との罪人七奪去る癖者之
余後又石渡あり馬加日記に輝れ村も西や年と相資り逐電まきり又這
大川甚合とと旅人の心件の額藏を人御向大石殿の使とと仁田山晋五が来り折那
大士とと唱し宣分君の事とと諸より晋五ととてさし罪人額藏の當日同類の資助
より法度之犯も逃七言の後大川甚合と姓名を更め諸国を徧歴するや世の風
声は少きも在下が那折は輝捕まひ同類をれも大塚大田とと喚做しととらひと

カ二尺八寸半兄弟の俠客を以て其の穿鑿を以て届くは自來首の名に相違せらる
 主君の外に其の面目を喪ひて是の後は那奴の跡見ながら搦捕せり
 今も手より便りせむとわすれんといふに其の跡見ながら搦捕せり
 彼ら強盜を脱する功ありしを以て其の功ありしを以て其の功ありしを以て
 搦捕せり搦捕せり搦捕せり搦捕せり搦捕せり搦捕せり搦捕せり搦捕せり
 奮闘し當夜押込領事署に送るなり其の奮闘し當夜押込領事署に送るなり
 加一況五連の罪人なり其の奮闘し當夜押込領事署に送るなり
 牽渡し遣はせし其の奮闘し當夜押込領事署に送るなり
 國までも恐れし一忽諸君を走らせし其の奮闘し當夜押込領事署に送るなり
 即ちその仰に其某諫言書を御読みて一々其の奮闘し當夜押込領事署に送るなり
 六夫婦の仇を能く射上軍木と奪つて今も軍木五倍二の薄皮なり其の奮闘し當夜押込領事署に送るなり

其身の私曲を以て之を其の奮闘し當夜押込領事署に送るなり
 敵上宮六の身は平井は幸川甚八つと謀し合つて額藏を盗見
 して誣むるに陣米吉田所進も敵上軍木と見合ふなり其の奮闘し當夜押込領事署に送るなり
 額藏を免屈の罪を落せし其の奮闘し當夜押込領事署に送るなり
 喉は射りし両三名は額藏の死を以て其の奮闘し當夜押込領事署に送るなり
 心死の友と扱ひし世の風声は其の奮闘し當夜押込領事署に送るなり
 致さず自業自得といふべし其の奮闘し當夜押込領事署に送るなり
 王石を辨るは其の奮闘し當夜押込領事署に送るなり
 智勇の少年は他は則ち其の奮闘し當夜押込領事署に送るなり
 後相模州足柄郡大坂村に生れし其の奮闘し當夜押込領事署に送るなり
 一止水と稱し其の奮闘し當夜押込領事署に送るなり
 逆臣なり其の奮闘し當夜押込領事署に送るなり

下情より上は通せし左に教の故新辟の月の明るの海雲を
掬ふ如し初大田小文吾の石濱の城を留めし馬加大記の奸計を
意まんはははれ大田小文吾の大隈毛野の資助より那城内で
死するを悪心あり故ありの臣長は関東へ使を奉り大塚石濱
の西城内に四五日逗留する折志願人の友話に初は信入る趣
の如し右の如し縁は那城内に留る額藏入とも憎むべし
小文吾の石濱敵に對し野に在るは臣件の大士の今番衆賊と
擧げ捕らる武勇の持はしは一人留する衆衆の士も願ふ礼を
厚くし言高様を免れ留めし御家臣は那城内に留る他内亦思
感に成るは我の亦あり是をも許せし堅と破り鏡之輝く軍功
ありは是の幸也當家の皇室の入り最憚る正なる千倉屋一
失ふははの報は只穩便の丸沙はをすは破りうはと解と盡
し理を演る直言敷刻に及ひかも良茶口は苦しはは人聲を
聞か

大刀自御前ハヤも果すとハ氣色変り曲承撥遣り乞と睨
り由元何より女流の主と侮り軟指揮かすは似而非談義然
るものも知らんや籠在介小文吾の素も悪意ありはは法
度之犯し有司を害しは法場と聞せざるは罪ありはは
今より下より上と犯さるは律令五正法度廢化は國は
時をゆるし掩身女流はは武威東北に揚き両官領事憚ら
長尾景春が母を今景春の東國に存掩見の留守と預り終る
大石千香米の女婿連の與り罪人捕提むは州民是より侮
り景春の武威衰へん恩禄も身も不足するは主君も是を
易々罪人們に最惜まは由元は不忠の臣に誅すは然も拒む
軟諫も軟めはは我圍に於て磔近し指しは護身刀を合し抗り
勢ひ烈く是をへん諫めは聴化女儀の應斷垂ひはは益
なりと云ひ是も驛を箱平伏言頭を拾けは然も思ひはは
又何ははは御諫を儘して大士を捕捕せむはははははは
小文吾の

當夫知當の勇士を大勢をもち向ふも數もあまぬ下の大さの侍と直承せ
大刀自沈吟と智者の千層も味を網を他人の衆賊を敷捕ら功を賞め招寄
や帷幕の内力士を伏置た不意を起す拉か捕捕るも易か九勢勿限一をよせよ
と迷ふ方あり示させぬ其れを奉り宿所は退りも配りあり儀はと謀る大刀自沈前
此の雄々々封内の訴訟を所々政事へ入る初めをあらうと謀るはかたき理り稱
は其れは油はとらぬも果子の家臣と君を悪言方なれば非法と知り謀る計を行
みれば果春當所は在るの陣徳まゝなや俺が諫言を容れ罪を免るる勇士を
誅する誹謗を免れぬは合期をあらう各位の是幸あるはと當家の與事不幸
之這里より密使をせよと主君は告宣まとも果春の親母君は大夫なりまゆを
今ゆるは這議を制する各位を助と仰せ給ふもあらう左も右も勇士の微運救ふ
由ありけ大厄難と争何せん只是まの命運ありと云ひ諦めひてと理り迫る良臣の

必難一理非明辨まゝ心標を傳ふも二大士の恨も解け今ゆは嘆息あり
外ありけ姉と甚介の小文君とええと大田の何と云ひぬを腹殿の謝影の公道をさ
われも婦人子稀るも勇敢智計も年長尾殿の鋒は強しと世の風声も
搦息ありけけりそれゆへに有るは執事の忠信理義明亮感するは餘り
あり武士の已と知るめ為すも死ぬへれ俺們既に執事は知れぬ罪ありけと云ひ
解けも聴けり便是天有り命又何と云ふ事死を俟の外ありと云ひ
賢頭といふ趣は是も余る俺們不幸薄命あり性もよく奸人の為は這身を
せん下目の女はとらぬ大坂毛野を除くの外に絶り這里に執事あり人善人のよし
は是切であるが憾は所の大塚大飼両個を環りあり且親兵衛と要
單節が存て是も大山大山も再會せよ下下の鬼と死んで過世甚なる業報
ありん心からけりあねど熱と熱く思病あり一覺期極めていと答を俱に腹の色

これが莊介も小文吾も初より河責之受て三たびの食後物足り死因半あり他罪
人と一所の措けを苦しとてさるればと獄舎入り多日あり兩人共ま声喚れての
るふれいひの獄卒の病の可成とどめを執事とせよと執事とせよと
湯劑を與へて將息を固るなり松葉餅の效驗ありとてさるれば左石も程
五月の過ぎたる北國も三伏の暑熱は勝を形なり時子園東の女婿達も暑中訪問の使
者到来しや岳母腹大刀自へ名を土垣の人情あり大塚有る大石家も今番の使者も
江戸の早業は戸田河の水の中へカニ尺八を懸け置陣番丁田進の年とす丁田五郎
豊実と喚ばるる又石濱の千重家の使者は馬加大記實武の妻戸牧の姓なり馬加
彌六郎御武をありけ。御武原の千原氏も自胤の危儀ありけ。或常武一家懸け後
才子由縁の此と只這社役のさるれば縣で常武の苗跡をまゐりて馬加氏を冒す
那禄半介のさるる近習頭をけ。近習頭をけ。近習頭をけ。近習頭をけ。近習頭をけ。

他と一味のめまされん人なり馬加の苗跡と立の分を考胤主は笑れぬ御沙汰と願ひ
ると類々傾け宣せり自胤遂にことなると老翁と評議の後千原堀六郎御武の脚
便常武の迹をたてた格を弁れり那常武の下總なる千重孝胤の近習なり小主小
疾行とありまゝ石濱の城はまゝに集の爲の詳に演説をせし王に宣示せり
漸々龍用せられん竟に權臣なるを無件の開書に苗跡と絶つる孝胤未
笑んと宣示せり故に現小人の過を飾りて賢とて自胤是非の問を懸ひり
み侍辭を又容る智恵のゆくと知るべし之の問話休題今程は千原大刀自の大塚
石濱両所の使者丁田五郎豊実と馬加堀六郎御武を身息道に召寄り
兩個の息女達よりわすれぬの消息を捕りて那里の安否を訪るなり却大川共と
大田小文吾を捕捕す粹の趣旨様を遠く説示す那莊介大塚の社官豊実
とえん悪僕なりあるに罪人なるなり五郎御武をわすれぬ小文吾の同業なり件



額藏を奪とりも又且用野とのり假少女を在籍し次見け馬加日記親子後類と
敷せり他所為とすそりまの當日廻六郎が又もせとるんと今わ具よ
ち及金命子他們の連立り這地はまの天の具四訓み綱分りし執事
箱戸津衛は密意と示奇計を旋く捕捕し最緊く獄舎に繋せり
見ゆとつ 前月廿日の所んより豫り他們の活る大塚石濱の西城内(幸)邊与えとひい路達
り小崎中途よりきとまきつて悔り及心たす首級を餽し傷とみと尋思
易五月の間に作らたは昨日今更に折り折り河邊をまの使より住同月未あけ
時日とせ甲斐又あくと飲くらるれとわれも勇む豊宝夫御式なれも傳ふ崔躍し
それ有るた兒計ひ大塚石濱西主君の妾を憐れりあめり勢ひは鳥許あり
ゆの件の額藏小夫君の主君の法度と犯し罪度のもみり在下切の與ふ共
追まらに雙敵ひは終も知がた折らた使に年位は首級をのり面と起る奇

ゆの家裏今月初め御女儀は稀る武直邊の御差配千萬金の御恩も倍々感戴し
りぬ定小珍重とと稱へ齊一額とらるる多敷ひと海へ大刀自由を安けし善い言はと
世話ありは沖連の本義なう羽立の朝用は當所と送りし手更武へ還れり既不の
その箱戸津衛はあるるうう那罪人們と誅せし吩咐れ程も頭顱を檢入れん
ゆの今更時這里侍り津衛はあつと等ひかと通て懸左右の女房の茶と看む果
子之有一賜りる恩徳大さるる活知不一個女房目今津衛は出仕女房の言まは天刀自
の額にやを俵不穿り候言ねと仰まると喉嚨の潰らるるふ浪を鶴の種戸引用
箱戸津衛由元の生車ま君もぬ出仕の礼服肩衣袴の飛騨信濃越後子名高内良智の
あひ合とよるふやち
人四十年の齡の公日りのやの上で七人の土主の向と過りて女前違ふ何候と大刀自指
近づく津衛は御向は吩咐と莊介小文吾を誅せ折折もよ東武なる西首の堀達の使到
着りては倍復を件首級を病問り遣ふ好家裏るん快定檢入れしといふ

ても余氣なくさし仰せ儘く大川莊介大田小文吾両名ハ獄舎より奪出ゆ既誅
戮付然首級七神覽入まんとて後方七元九ハ改房侍り二箇の重層
後方らハ俱一携當那武士の首函は袂に合添す不や由の左のさす。さす指を退
か登時腋大刀自れ首函とつらるを喃津橋俺身が金馬両箇の首級と元九は
辨より回と認りしも右ハ真偽之疑不定なり。その先丁田五郎と馬加幡六郎
せう。這人々ハ初も認りしもあんとのりれそやろ。昨五郎豊実ハ執事由
云はらち對ひ且その所役と當り目今御前の御のど。其ハ五ヶ年己三刑兄町進額
脅と折向此折遭際く劇だ規とハ聊譲りてとハ蠅命御武亦由先と對ひ其
とも小文吾ののびるれはも先代大記が宿所や。那假令早用野の歌唄く。當晩小文吾も
席上在す之因とろとあり遠外より夜視を。今も志んをひなや。由元徹受てを
最宜証人ハ余ハ各内。既見く真偽をまう。わぬひと答へ両箇の首函を誅と。依

差寄され。豊実ハ大川莊介と牌付とを受取。御武ハ小文吾の首函引を共信ハ
甚を檢遣り左見右見。實は是記憶有。那莊介疑ひ。是ハ正しく大田小文吾
眉毛自昇。梁年盛ま。目裏もそと。此も違ひ。昨五郎殿句。蠅六殿句。御
邊も囃ひ。堅定。句。錯誤るれ。同是證據。此這ハ所持の東西あり。東
東武へ。遠く披露の折。便宜のみ。然様々馬意も同前。ヤ上箱戸殿句。這
兩層の行東衣。東面ハひらと。同ハ由元傷る。袂色とち用ん。然ハ莊介ハ小文
吾も單身運旅。あり。か。包裏。有。存。也。初。ね。余。も。所。望。の。あ。ん。然。と。そ。や。り。推。し。大
則他。ハ。兩。刀。入。且。兄。ハ。人。と。合。中。ハ。違。手。と。受。取。る。豊。実。御。武。ハ。何。事。ハ。牌。を
足。々。迷。不。被。此。と。取。り。共。信。と。約。半。响。を。御。武。を。膝。に。鳴。り。き。る。
此。の。大。川。莊。介。と。牌。を。寫。さ。し。兩。刀。ハ。當。君。自。溜。の。和。藏。ま。り。小。條。落。葉。の。大。刀。ハ。表
装。寸。尺。些。も。違。ひ。今。より。十七。八。年。の。昔。寛。正。六。年。の。冬。十一月。東。飯。原。首。層。度。ハ。筆

但刀大... 記帳

山邊東木は敷れ折る中途に盗見あり嵐山の尺八と小篠原葉の両刀を奪去おれと... 當年の東の十四五歳の冬...

大刀と折... 大和と腰...

亦内せすを量表し小文吾們が額藏の莊分を奪取して逃亡せ折他們為敷れ... 社平が大刀おれを代表装總々初はかりを鞠の銀の巴蛇や...

不眠をもちて不寐ひて実事なりと云ふを恥ぢ片見をせしむ此後と探問は
多し果し搦鬼を件に在介小文吾ハ大塚の大石殿と石濱の千番殿は昔悪
此有りや片見殿は憎ませしむは皆君達の仇討に徳地出あり性命有
かた下といひぬるやありてかたかく教養を多く受ひての隠居者なり其妻の鳴呼き
よ七報七土丈二脚上は子品子後と命を果せり那二大士と救ひて衆議を疑
て直に旅し是より後山々執事の家へ便せ未だ若當は萩野井三郎は方
ある事便事も人情をさす小文吾在介罪過の謝罪と輕くせんとのこら官は善
まるとも執事箱戸由亮の心ある方正しく萬言又私あるをなれ次國太が人情と此
此も受てこれより萩野井の爲便り又各を職を執事助助の路を歩け次國太が準備相
違は徒事ありて獄舎へ食餌之餽り二大士は唐んと又其の準備をなれ萩井と
小文吾ハ死囚年を名ける獄舎に繋ぎし親子毒毒と云ふと食餌を遣はす

稱は况親く對面し夢中許されしけれ次國太竟に術計喝し獨類に集火煉のこら善
日曆と經卷六月の某日那二大士の首を刎られ折し武藏の大塚と石濱より兩
個の兎使田畔五郎豊実馬加廻六郎御武と喚ばるる執事の若當は萩野井
三郎を副れ件の首級と大石千葉の両家へ贈進し丁田馬加の萩野井と
共信する片見と許し去り既に帰東に赴けぬと報るありて次國太驚れ且ち
歎け然るや中那二大士の武藝を勇力に秘し又信する後傑と信する功
ありや賞を領する者との御者との與に舊罪科れはと雙々首を刎られ片見殿
死計ひ執念深に女儀の御車ある好遊者大兩所の使者の迹を跟野荒ていく首
級と奪取し死後の恥辱と雪ぶら俺山彦依者といわれんや要するは深念する土丈二
卿三們威名歎腹心の杜校と猛可に聚合謀し合と大塚石濱兩所の使者の去向を尋
起敷し首級を奪んと謀し程に忽地障りのて本日は空に消せり萩野井

ちやうど。二日後に。且火家事與同。衆議一決せり。六宮出謀。竟に整ふ。かゝるも似せり。多かり。存下某生。再説。稻戸津衛。由元。大石千葉。兩家の使者。の萩野井三郎。連立。伴當。と。東路。一。去り。一夜。又。志念。を。あ。れ。か。と。毒。子。の。奴。婢。を。皆。自。願。して。獨。家。廟。に。籠。居。り。更。願。す。ま。ま。看。經。の。声。蕭。然。と。す。え。け。り。抑。由。元。家。廟。の。下。壇。より。方。一。向。の。板。席。あり。又。よ。下。り。土。室。を。穿。て。深。六。尺。許。を。一。室。を。造。り。し。り。か。か。水。通。入。る。と。す。ま。ま。三。三。火。の。火。の。と。り。佛。器。を。數。を。為。り。て。生。子。を。所。の。所。に。あ。れ。か。外。より。入。る。の。め。い。り。と。毒。子。の。外。の。奴。婢。仍。た。り。れ。を。和。の。稱。を。う。間。話。休。懸。然。由。元。の。友。友。と。す。ま。ま。比。及。子。圖。宅。の。成。熟。時。と。す。規。知。り。て。毒。子。の。板。席。を。推。抗。し。て。除。け。り。框。を。と。り。と。敲。り。て。暗。號。を。一。土。室。より。階。子。と。登。り。推。管。を。兩。個。の。仕。使。出。し。り。是。則。別。人。を。大。川。莊。介。義。任。と。大。田。小。文。吾。の。情。願。を。看。官。莊。介。小。文。吾。ハ。既。に。无。刑。に。殺。れ。り。首。級。と。東。武。へ。流。刑。せ。り。今。又。這。里。に。あ。り。え。り。の。不。を。原。由。元。ハ。初。より。這。二。大。士。に。

義氣胆勇。進止。精。非。道。を。做。ら。れ。の。ま。あ。り。且。裏。子。武。藏。子。存。り。時。那。屋。小。僧。れ。り。領。主。の。法。度。を。犯。せ。り。是。已。に。と。ら。る。の。故。み。多。罪。あり。杖。を。や。と。り。ひ。の。舞。臺。に。理。を。推。し。籠。大。刀。自。之。諫。め。り。用。ひ。れ。ね。は。是。非。及。び。を。莊。介。小。文。吾。を。誰。引。を。と。夫。庭。に。擲。挿。せ。り。爲。獄。告。合。違。を。と。す。一。室。に。閉。籠。四。道。て。る。又。思。ひ。を。旋。を。今。朝。二。大。士。生。拘。り。酒。頭。二。人。下。を。元。酒。六。穴。八。と。喚。ば。れ。り。小。僧。唯。を。圖。影。を。身。材。手。度。然。る。莊。介。小。文。吾。は。是。も。違。ひ。を。と。り。元。酒。六。穴。八。と。喚。ば。れ。り。而。賊。小。僧。を。飲。み。を。嘔。し。却。二。大。士。の。早。衣。を。被。せ。り。曉。の。光。を。見。て。元。酒。六。穴。八。と。喚。ば。れ。り。獄。卒。の。病。痛。爲。り。ん。と。て。苦。を。乞。ふ。獄。卒。か。も。あ。り。の。聲。い。や。嘔。果。り。馬。脚。を。踏。破。隙。を。け。り。自。然。と。知。る。の。あ。り。け。り。後。而。六。月。の。中。流。す。り。大。石。千。葉。米。の。使。者。の。豊。豆。太。と。御。成。が。各。手。裏。に。持。た。れ。り。大。刀。自。則。由。元。二。大。士。と。斬。れ。と。下。知。せ。り。由。元。の。辭。を。懸。り。酒。六。穴。八。と。

獄舎より一筆出さず帰復頭を削りけり。此の機軸を知りしもの若き當道野井三郎
と腹心の老兵の両名を過すれども。折言書を寫して。馬車に口を封じけり。後々
まづも懐きりけり。救はれども由元。那由実と御成の舞のめい。軟とあつ。す。其。介
と小文吾。両刀を添て。実檢小備へ。未嘗憶んや。莊介。腰刀の昔年。栗飯原。宿屋。笠山。縁
邊。新れ。此。四郎。と。船。虫。の。馬。加。大。配。の。六。密。音。心。と。宣。お。す。大。尊。田。各。之。逃。亡。す。小。小。伴。唐。海。名
又。又。小。文。吾。の。帶。刀。力。庚。申。塚。の。法。場。々。々。大。飼。現。八。分。合。捕。ま。る。や。敷。上。社。平。が。大。刀
る。り。現。八。分。を。莊。介。の。與。へ。不。在。於。親。の。記。書。當。道。野。井。三。郎。の。名。を。寫。し。て。馬。車。に。口。を。封。じ。け。り。
余。後。五。大。士。集。り。道。中。莊。介。小。集。り。又。莊。介。山。を。立。退。く。折。信。乃。亦。此。れ。を。小。文。吾。に。贈。與。
より。より。小。文。吾。を。腰。に。放。ま。す。あ。の。之。捕。捕。れ。一。夜。艾。莊。介。が。兩。刀。と。共。由。元。の。小。舟。で
舟。假。首。級。と。真。と。く。ま。假。首。定。子。諺。で。ら。由。元。が。謀。り。兩。十二。分。小。行。大。川。大。田。の。兩。勇。士。ハ

萬死と出づ一生と保ち。這道に取れり。あを由元。賢と愛して。六糶。ま。の。君。の。非。を
補ひ。誠心の致し所い。ゆ。ま。の。由。元。初。より。家。廟。に。供。を。茶。頭。飯。米。及。装
物の。菓子。ま。も。日。毎。に。空。内。へ。餽。下。し。ゆ。二。大。士。之。類。ひ。れ。莊。介。の。小。文。吾。も。三。十。餘。日。に
及。ま。ず。鐵。籠。を。こ。る。り。け。り。只。這。勤。の。こ。ろ。ま。ど。土。産。苦。み。席。と。重。布。を。大。盤。あり。茶。器。あり。出。辰。の
折。を。袋。に。斂。し。之。密。々。に。餽。り。二。大。士。の。稍。久。く。中。に。存。り。地。氣。を。受。む。亦。も。盛。昌。の。折。を
れ。土。中。の。刺。情。涼。み。を。見。者。熱。を。忘。る。可。ま。ず。此。も。恙。あり。と。身。を。有。り。り。予。を。見
作者。の。自。注。あり。莊。介。小。文。吾。の。死。し。復。世。に。見。る。福。福。凶。吉。説。と。都。々。右。の。中。に。看。官。善。惡
心。報。の。違。り。を。智。へ。一。問。詰。已。説。紹。前。説。莊。介。小。文。吾。の。想。は。空。内。より。出。り。由。元。は。ち
世。對。ひ。今。吉。福。の。恩。再。生。の。報。ひ。を。廣。く。由。元。主。を。空。ま。り。て。假。首。級。の。口。豊。且。夫。獨。也。
古。又。那。條。の。首。尾。箇。様。々。と。違。ゆ。り。説。示。し。今。の。心。安。れ。大。石。千。重。米。家。の。兩。勇。士。ハ
鐵。櫃。の。首。級。を。獲。せ。け。り。曉。々。不。立。去。り。去。向。信。濃。路。を。經。り。邊。外。清。生。快。投。之。赴。於。柳。今。番。果。か

秘計の御邊近の奥の...
予と逆ぢやあよりて...
あり然るがあれ賢を...
漢子先蹤目取まる...
〇一...
〇二...
〇三...
〇四...
〇五...
〇六...
〇七...
〇八...
〇九...
一〇...
一一...
一二...
一三...
一四...
一五...
一六...
一七...
一八...
一九...
二〇...
二一...
二二...
二三...
二四...
二五...
二六...
二七...
二八...
二九...
三〇...
三一...
三二...
三三...
三四...
三五...
三六...
三七...
三八...
三九...
四〇...
四一...
四二...
四三...
四四...
四五...
四六...
四七...
四八...
四九...
五〇...
五一...
五二...
五三...
五四...
五五...
五六...
五七...
五八...
五九...
六〇...
六一...
六二...
六三...
六四...
六五...
六六...
六七...
六八...
六九...
七〇...
七一...
七二...
七三...
七四...
七五...
七六...
七七...
七八...
七九...
八〇...
八一...
八二...
八三...
八四...
八五...
八六...
八七...
八八...
八九...
九〇...
九一...
九二...
九三...
九四...
九五...
九六...
九七...
九八...
九九...
一〇〇...

可下の論重代の東西ありて今十八九年乙前...

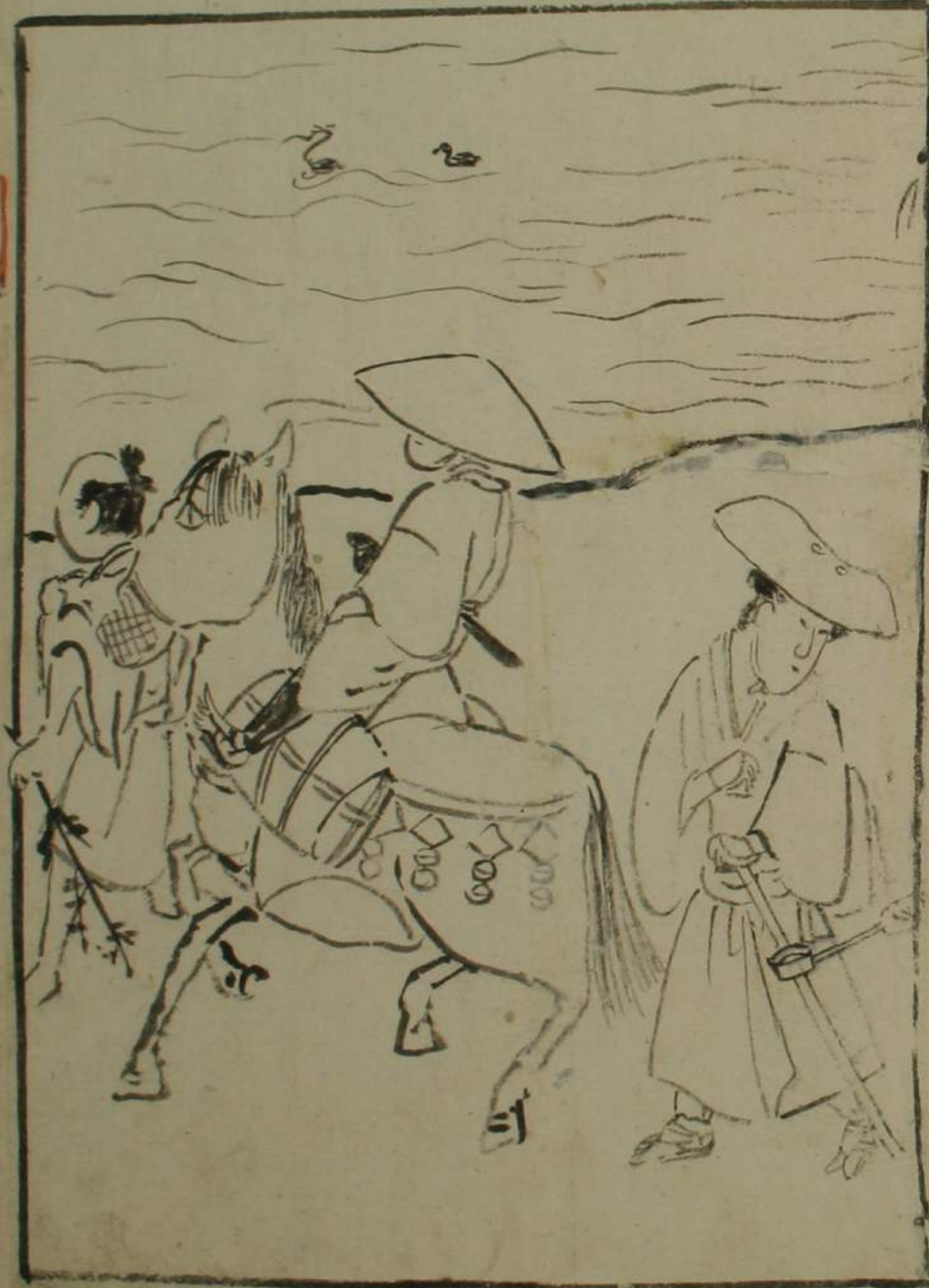
可下の論重代の東西ありて今十八九年乙前...
〇一...
〇二...
〇三...
〇四...
〇五...
〇六...
〇七...
〇八...
〇九...
一〇...
一一...
一二...
一三...
一四...
一五...
一六...
一七...
一八...
一九...
二〇...
二一...
二二...
二三...
二四...
二五...
二六...
二七...
二八...
二九...
三〇...
三一...
三二...
三三...
三四...
三五...
三六...
三七...
三八...
三九...
四〇...
四一...
四二...
四三...
四四...
四五...
四六...
四七...
四八...
四九...
五〇...
五一...
五二...
五三...
五四...
五五...
五六...
五七...
五八...
五九...
六〇...
六一...
六二...
六三...
六四...
六五...
六六...
六七...
六八...
六九...
七〇...
七一...
七二...
七三...
七四...
七五...
七六...
七七...
七八...
七九...
八〇...
八一...
八二...
八三...
八四...
八五...
八六...
八七...
八八...
八九...
九〇...
九一...
九二...
九三...
九四...
九五...
九六...
九七...
九八...
九九...
一〇〇...

其の執事少ありしか。六七十年に前主舊里より一時坊買のより十五金に購
 治る兩刀ありて親の意に稱ふが依り秘指行大塚大飼の流寓を備備せし
 其の西刀と出しく信乃子贈りたる後又大塚大川子贈りたる舞の趣は方絶社介の語説
 也。公明を乞ふに井井介沈吟せし此夜を合意せし。晩生を父の遺刀の昔年没官せし
 後堀越の御所藏に折何合ひあるに鐘入君に到りて粟飯原首の贈本め主受
 せし。後ちやうとて。○此夜を合意せし。○此夜を合意せし。○此夜を合意せし。
 主は還るも狂これあり又怪むは足らざる致と。迭代は説示せば由元り耳と澄らるる
 羊駒をうね管を感嘆し。通徹如刀の傳來。疑惑のいふ氷解せし。此後
 一奇事あり。俺が本音も亦伊豆を親に堀越殿。仕へたるめ之れ大川生の先君
 子と其の文の疎くも某弱冠あり。此より衛士大人は從ひて文學を授け武藝を傳へし。

師弟の恩義も亦深し。加以某の年十七八より比羅海の譚より父を逐け親族許寓
 居せし。折は衛士大人の又と諫め母を和諭し。言返さるるめは徳語の君子を
 子に惜む。一屋奈君の非は身を措難く竟り父は伏せし。某の親の妻よ
 笠倉の一人由某を又より一層の力を盡さる。六五は過る。介後父又後室御母子の他御
 起立の物。亦徳語の母より。直受す。比より。然とも。人信は程程を最
 大に懐く。思ひくも。往方と。ねがえ。也。由。難。見。君。父。の。郵。絶。政。知。元。花
 ぬ。其。某。外。も。亦。流。浪。人。其。由。縁。心。當。道。地。来。幸。ひ。小。湊。れ。文學。武藝。を
 も。長。尾。殿。に。傳。へ。漸。々。各。置。揚。せ。れ。老。支。人。を。諫。れ。は。徳。語。縁。あり。な
 が。世。に。同。甘。ま。の。人。ま。は。れ。大。川。生。と。衛。士。大人。の。獨。子。あり。し。や。又。折。刀。と。そ。と
 にも許多の年を歴し。其れを。賢良高貴の両君を。寛柱を。情む
 爲。心。を。盡。す。一。の。死。を。救。ひ。試。し。則。未。だ。了。後。師。不。返。止。昔。因。昔。目。義。素。懐。不

多 不勝の軟び察しと其の橋をちり大川に流た情の波津衛道と別々
八百日の越の長濱長し天や明を惜しけり若かりしとや坐し慮涙の進む
眼色をさかす原末執事ハ世父の弟とせし二親の世とまり比の才と寒
暑と覚のこき弟子を朋友とせし知るるあり小家傳の刀の来歴より不測に執
事の素生に説評されし七親は再會見る心地し昔故の情も堪え死愁昔
縁のあもも執事の徳誼の言はんと唐山漢の古同祖の時季と久しく合意て見
漢の良臣は傲き朱家も優へ錦のよき花を添ふ心標を有されば晩生何事ハ
良主は仕へ一軍の大將と奉り料くも長尾殿と辨と文とありは為三舎道入
伊豆の嶮箱根権現當国を討ち討ちの神も格を照覽あれ運義は背くへとと
勇士の心の誠は小文吾も亦感激し小生は只次國太を使者ありと必し執事の
忠家候るる折はあもも備身三初は倍く福く泰くてをゆるん由意額と折

二兄の賞は美ハ分は過る某ハかち當えや就又一談あり向中既示す如く各の両
刀の首級は添て老主人の宝檢は備下は那豊実と御武分傳來と演證據の為
賜りて思ふは返され大田生の中刀のやうに遠里は住り大川生の両刀は是先考の記
るがこそ最惜くはひのん世の帝も亦藏の宝の身の差替といふあり 得失は皆時之
とに以請めしや午萬人の各刀ありとも命は易く東西やのよらひて秋は色は四口の刀を取
りては三刀ハ新刃もも鈍味は皆覺あり 願ふも是を交收めり降る立退ゆ人又傳長
おれはよもま這一包ハ黄金十兩盤纏のなま贈りまわしめしと笑知るるか運他は未預
置置する両箇の行装も運首ありあり格身装束は時々出づる戸の夜中不
通るはも時七鼓より木交あれりも物もと見り木交も亦這里の留別は
甲衣より衣裾は在備とま酒を木も復遇をた別を惜む寸志をとりはわ
こや運の内より玉鉏子二両の儲も其を取出す酒ををを唐をを登時其小



文吾ハ刀を乞ふ金を取らざる由免の心配りの教ひて
 又いひける責教の事那西刀の親の記の事
 今所より見ると備折せり那西刀より復す
 刀と共は贈物とせしむる遠恨をなすゆへに武運竭
 推辞なるよる由元々又元を願て左右より持り
 へし介意ありて復々まき快らざるを枉り
 士竟に推辞するや又戴り共信を行東少を假め
 献及ふ程の鶏鳴忽地時を報り別之使を由元
 二蓋の草鞋と社介小文吾は遠年より二大士

西刀を跨行東之駈ひ存一縁類はまき草鞋の物
 合は左に官坐と引提り度門より其より由元
 又けり介程は社介小文吾は那木交又二の城
 ぬとやいめ伴宿共は懸留し俺們が西刀より
 他們が去向の信濃路をんとし行てあるて誘
 齊一走る社夫が玉を計り六月の火火日者
 飛ぶ如くは想ふは話分兩頭信濃路や岐嶺の

かゝる旅宿の幾夜もの昔を今も語つたの傳へ夏寒に諏訪の太潮風
渡り浮葉の鳥と尾と掛り羽も枯れ世と不察の世も無き凡の野ゆりの這里は兩
個の乞児あり路の傍の塘堤の下は木枝折るく伏し屋の穂家の七折門田の高米飲水
草織做靴草簾サ延屏風と合壁現流す凡の虫の又と鳴く父の三巾の合ひで倍
白を那寒山子拾得は似て非人を和れ中より一個の乞正の年計八十許葉の一足は
あねも故疾を足踏も言を鎌倉寒兒と囁いた又一人の少年は襦袢の
夏衣麻衣生箱狀蟬の羽は素肌の衣通り一身の皮醜く相摸小猴子と辨方徒而
この裏の乞児の這里を相摸の旅客と諏訪の社に詣り人の袖にこん候程小這日も既小
往還稀る土旺半分の日午は臥疲倦る鎌倉寒兒ハササ壁を敲くや囁奏の
相摸小猴子は午の暮りも東西欲しむやけの朝を幸るや昔の銭ハ七八文餅を買ふ
吠きと足かき何のや里への折憑むやと小猴子ハ點頭するやと

尚五六文棒の各飲料も足らぬ全身肥満臍の病氣もろくええ腰の皮も甚
る故に角力の怪我軟蛭児の神の初り過り出せぬと河をとり笑へ鎌倉
寒兒古も鳴くく嘔又打撃て舞るる俺も初り鎌倉を流す米町寒兒屋の小
官人阿乳母日傘を云月られ懐かしく病の失の商賣の精進物を癖ひあ十六七
の春秋も大森の化糖後難定魚の四角と月の出る晦知らるの標首遊樂五回口の
庫布の傾くまは幸きせ使ひ足す又けり賭鈔は耽り親の東西他の東西は借
倒し身支倒し竟り亡命久離せれ彼此と一宿富の歌舟や先毎は衝流せんや
磯も着を山持の箱根や雲介ある折薄情や便毒を踏出し四月は膝まき長櫃を
昇れど瘡をかまき歩ぬ二足三文の銭も全か憎んや坐行乞児はなるる親の四訓を
心の中を心の中血を心の中甲斐文を心の中汗孔汗は糾くる身の垢脂は草津へ湯治の
かゝる這里不用居の山徑は伴ふの望見も子と徳も各経讀むはもやれんや

心細げの情態を往還の人の袖に之を行状仍て件の如く却て如きものなる故に宿る事とまじり
小吉年二八十七秋升り十八十九文揮取さるる中實りぬ容止も醜くも損の辱は
美服被せ人肉經記宗太子えせしが梅孺九次とて人へ相根て遊姑王露馬て遊
那王僧正坊寺辨庭心も現るる標致もなる然そ解ぬ奴龍陽まはれと口説
ても情なきを嫌ひ釘死くれば素生の奈何と問ふ小猴子の冷笑ひや作輕口を不
足が事者であるが男子一足なるべし可愛や浮世を狭布のひ合ふと竹柱狗児の産
室に異なるぬ寂物語身の懺悔りふ益あるとあかき落さかおるる谷河の流れて昔
飲むとも暑者熱を凌ぐ相宿形の一樹の蔭に他生の縁人りえりけりよるものなる七癖
八歳児の痲積丸より出奉公とて人香も名もあはれ俺舊里の小田原も年朝猴子の
初め小鏡を編み買ひ喰ひ使の生ひ陽の久し國子點々燧薩摩芋飯酢醴酒
柿密柑大福も論健味わや何ても四支之摠購盡了夜拍舖云當花主とられと美

リウコト
理致動もそれか言向き子鬼を搦倣ひ日毎東人主官の目視を殺羽りか扱入む賣溜
鏡の置所 狹に袂と共宿り寝びけり日來の横着復吟味より 傷非車も猛可虎を
割禪は結着き一分金 刺殺祿棉衣の松坂も伊勢とて心は得も這身這儘脱泰
官同氣同病相憐む友達誘引る乞食の崩端 五十二驛六十日百會押れぬ若宮五ハ
三益益を安の同好三名此の親を東人なり已か隨る骨戰飯の柄取一本刺薦一芭飢
ふらあまかりる所 羅り後れ 野計の先をなれ 端を赦免し漏れ 後實は仍る艱苦も
信濃三界流落る 無路宿は明と袖との縁起り通て是も一啗鈍ま 虚をこり
暗なるに 腹に北山南の町へ走一走り 東西吹ん 鏡をかうね餅買て是れ有軟
ある物と無差の間に 差をせ 鎌倉金藏見の遠く 白梅梅と傾け 今もか橋む
と七八文遊子とて受取 相摸小猴子の南と授けいせ 休題再説大石千葉兩
家の使丁田畔立郎豊実馬加廻六郎御武ハ長尾家より添られ 秋野井三郎と共

信子片貝の別館を立出、帰路に逢ふ。那假大士、兩箇の首級、箱戸由亮の助
言の隨、深く鎧櫃の内、子懐め、奴隷の持し、且小休、落合木の兩刀と、殿上
社平の舊刀ハ亦是、緊要の東西、あれは、各々の腰に跨り、其身々の腰刀ハ俱一
は、若君、實に持せけり。され、這、豊実と、御武ハ、好意、送、凡小人、功を、會、御あり、けれ、
今、采、田、萩、野、井、を、副、使、あ、な、れ、俱、東、武、へ、赴、く、之、内、に、飲、み、酒、を、兩、人、宿、願、謀、合、わ、り、
三、郎、を、あ、ら、と、他、先、亦、逸、速、了、帰、り、な、り、主、君、主、君、の、恩、賞、又、願、と、や、と、計、較、あ、れ、旅
り、ま、た、り、も、か、ま、り、ま、た、り、ま、た、り、ま、た、り、ま、た、り、ま、た、り、ま、た、り、ま、た、り、ま、た、り、ま、た、り、ま、た、り、ま、た、り、
金、三、郎、と、共、中、北、陸、中、山、道、の、各、店、の、生、席、同、敷、あ、り、を、進、む、事、も、亦、あ、ら、と、他、を、去、
へ、日、毎、不、朝、立、を、避、く、せ、日、の、升、る、ま、で、臥、こ、り、夕、方、亦、此、れ、準、し、必、日、の、暮、れ、に、旅、舎、に、宿、
ま、り、と、萩、野、井、之、郎、談、り、有、一、日、豊、実、御、武、は、遠、直、と、い、ひ、か、目、今、炎、暑、の、折、る、朝、
を、旅、舎、と、な、り、日、午、亦、休、息、と、な、り、遅、く、出、り、日、午、亦、總、と、言、ひ、故、に、動、王、ハ、伴、當、
の、大、後、も、あ、ら、と、願、ひ、翌、日、朝、涼、に、旅、舎、を、出、路、と、な、り、午、の、比、ハ、伴、當、ハ、亦、且、總、

と冷たへ

ゆ、の、か、ら、し、ん、と、豊、実、ま、け、あ、い、と、和、殿、ハ、一、を、知、り、ま、り、三、を、知、ら、げ、り、今、番、ハ、尋、常、の、逆、
旅、の、あ、ら、と、首、級、と、い、ひ、遣、刃、と、云、那、回、類、か、り、跡、を、跟、け、隙、之、現、ひ、奪、果、ん、と、欲、ま、り、
凡、の、資、料、り、か、ら、り、然、と、未、明、に、旅、舎、を、去、り、是、途、に、程、を、旅、舎、ハ、九、ノ、刃、を、借、り、似、て、最、も、危、
三、郎、亦、鳥、語、り、な、り、
危、く、な、り、と、同、之、御、武、側、も、亦、謂、あり、時、中、路、り、人、を、亦、危、く、と、夕、方、ハ、三、郎、
比、ま、り、里、人、睡、む、を、踏、め、く、人、あ、ら、と、故、に、危、く、と、日、午、亦、總、と、言、ひ、故、に、動、王、ハ、伴、當、
は、の、ま、を、れ、和、殿、の、知、る、と、な、り、三、郎、ハ、且、差、さ、ぬ、と、い、ひ、見、と、素、直、に、旅、舎、を、
傳、せ、れ、是、の、後、朝、立、亦、使、の、必、談、を、候、共、且、見、寐、と、な、り、今、程、ハ、豊、実、
御、武、ハ、三、郎、山、上、り、上、毛、る、田、介、出、ず、故、意、信、濃、路、に、赴、け、り、され、由、亦、山、路、の、程、中、に、
ら、の、内、に、入、り、信、濃、而、豊、実、御、武、ハ、信、濃、の、岡、田、に、宿、投、り、夜、伴、當、ハ、其、示、
し、た、日、毎、亦、申、り、及、曉、り、旅、舎、を、出、り、路、を、三、言、は、り、捷、徑、と、な、り、

諸士以上者、備門の
執事、諱の若、
と解せ比、
這里より、
後

日の午過ぎ比、六七里の路次を經て、下の諏訪まで、まきり這頭、順路を、
出ると、那之郎、いづれ、見たり、いづれ、路を、
醋盃の、日午、有、
頭、汗、
は、
是、
尾、
三、
割、
の、
人、

この、
顔、
豊、
血、
あり、
塘、
世、
功、
と、
は、
出、
隈、



快出上巳の老翁の御用あり快く出ると諸君は最も奇鋭く罵りけり
多箱かきまゝ相摸小根子に這て体と違て驚かす
着て推の樹蔭に脚を規をうか程に鎌倉を震見たり
細くして胆を淡く戦慄れ眼を暗く声訥りてや刀柄連懐のりる甚る
御用致知ねも遺身花を過るに足りて踏巻き一歩も運が許さ
久しりや果を大家に声知きて壘行あはれ先脚懸るも出るとは
相摸をりまは探り腰を推立て宙吊りて茶店の頭へは伏撲地と推居り
大刀の緒を解き袂をまき野袴の袴詰之落葉の刀を引提り曲直空と共
放ち立ぬと信と眼を面覗り向ても喜ん居殺の準備は終る相
なひ嗟と叫び平張り早立見馬加御武落葉の刀を鎌倉を又次の巻の首
を解けり

里見八犬傳第八輯卷之三 終

天保二年卯年

冬十二月二十四日稿了

著作化岩土子集

筆福硯書

大吉利市